

## 【ばばよめ】

これも懐爺にきいた話。

村役場の役所工事さんは、気味のわるいおやじだったので、五十歳にしてようやく嫁がくることになりました。

見合い写真しか見たことのない、うぶな役所工事さんは、初々しい嫁さんがやってくるものと、心をときめかせていました。

結婚式の時、白粉まみれの嫁さんが感激して涙を流すと、白粉が一部溶けて、皺だらけの顔が見え隠れしたので、気の小さい役所工事さんは、おおいに心配して、

「おまえ、歳はいくつじゃ」

ときくと、

「四十九でござります」

と嫁さんはこたえました。

それなら自分より年下だからいいかとおもったが、死んだ母親から、

「女はだれでも嘘つきじゃ」

といつもきかされていたもので、

「怒らないから、本当のことをいえ」

すると嫁さんは、

「五十八でござります」

それでも同じ五十代だから文句はないかとおもったが、死んだ父親から、

「女にだまされてはなんねえぞ」

といつもきかされていたもので、

「本当のことをいわないと、離縁（りえん）するぞ」

「七十七でござります」

まいったとおもいつつも、母親よりは一歳若いから、我慢するかとおもったが、死んだ恩師の和尚から、

「女は魔物であるぞよ」

といつもきかされていたもので、

「本当のことをいわないと、お経を読むぞ」

「八十六でござります」

こりゃあかんとおもいつつも、こうなったら本当の歳を知りたいとおもい、

「おまえ、鼻が欠けているが、鼠にかじられたんだべ」

「ご主人さま、嘘はやめてください。わらわはこの百年間というもの、鼻をかじりとり鼠なんて、きいたことがありませぬ」

「げげげ」

ちなみに、このおばけは【ばばよめ】という。